



藍
様
丸
太
子

官
能
界
最
大

ADULT ONLY
R♥18



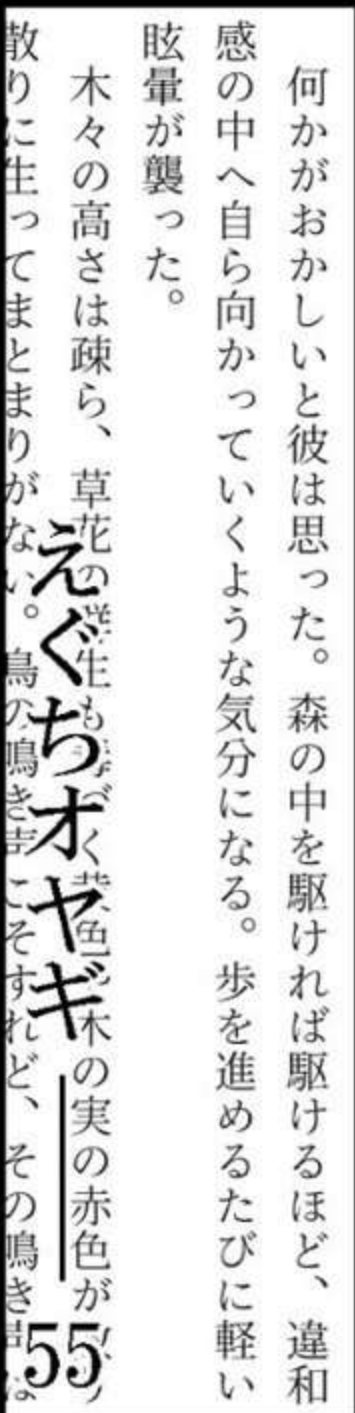
藍
様

丸
子

命

命
子
殿

藍様丸呑み合同誌



参加者一覧目録

マヨヒガの森

どうしよう……
完全に迷子だ……

じいちゃんが
人食いの妖怪が
出るから近づくなつて
言ってたのに……

えっ!!

えっ……あ!

ごめんなさ……

人……
いや尻尾がある！



これが妖怪……！

どうしよう……
早く逃げなきゃ……



……えっ？



どうした少年？
道でも外れて
迷い込んだか？

う、うん……



こんなところにいたら
人食いの妖怪に
喰われてしまうぞ？

ついておいで

70

そうして出会った
妖怪のお姉さんに
ついていくと

ものすごいお屋敷に
たどり着いた――

今夜はここに
泊めてくれるらしい

そして森で歩いて
汚れた服を
洗濯するからと

言われた通り
服を脱いでいると――

急に目眩がして……
目の前が真っ暗になって……

目が覚めたら……

目の前に
巨大なお姉さんが
居ました――





迷ったなんてそれは嘘
この森は入ろうとせねば
入れやしない……

お前のような侵入者は
私がたっぷり懲らしめて……
骨も残らず
始末しているのさ

そっ
そんなっ！

よじ……

そんなの
博麗の巫女が
黙ってないっ……！

なあに
バレなければ
いいのよ……

証拠もなにも
すべて腹の中……♡

となると私が
人喰いの妖怪って
事になるのかしらね？

じゃあ妖怪らしく
味見でもしましょうか♡

や、やだ……！
待って……！

ちぢみ……！！

ん……



お前もこの乳を見て興奮したのか？

ええ？

年端もいかない
とはいえ男は男か…



うわっ！



やだ…

うき…

なら冥土の土産に…

嫌って程味わって
いくといいさ♡



きゅん

んんん

あ



はあっ...はっ...

はっ...

はあ

はあ

終わった...?

うわッ!

ズル

満足げだなあ...?
お前だけ
楽しんでからに...

私も興が乗った...
少しは楽しませて
くれるよな...♡

ニチャあ...



この体格の差異だ
こうするしか
あるまいて...♡

そ...そんな所...



な...何を...

はっ

ムムム

中で動いてっ…♡

なかなか
良いじゃないか…♡

ぬいぽい

ぬいぽい

ぬいぽい

ちゅ

ちゅ

気張れよ…♡
中で潰されて
しまわぬようにな

もっと頑張れば…♡
少しは温情をかけてやっても
いいかもなあ…♡

ムムム

もっと藻掻けっ♡
もっと抵抗しろっ♡

ぬいぽい

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ



ふふ……

よく頑張ったな♡

あ……は……

お

もうよかろう……
そろそろ喰らって
やるとしようか？

なっ……!

そんなっ!
話が違う……っ!



なあに嘘は
ついていないさ……

情けをかけて
噛まないで置いてやる

いただきます♡



んぎょ...っ!

こ...こんな...

こんな事って...!

びしょ...
ぐわんぐわん

あっ...

びしょびしょ...
びしょ

さす...

ぐわんぐわん
ぐわんぐわん
ぐわんぐわん

ぐわんぐわん
ぐわんぐわん
ぐわんぐわん

はあっ…

うう…

ド
ク
ン
ド
ク
ン

ほ…本当に…

食べられちゃった…

の…?

ズ
ル
ル

し
る

じゃあこれ…

胃液…で…

僕…

ど
き
り
る
る
る

溶け…て…



お...お...お...お...お...

お...お...

お...お...

お...お...お...お...お...

お...お...お...お...お...

ご馳走様...♥

すっかり
蕩けちゃったかしら？

これに懲りたら
妖怪の住む森には
近づかない事ね♥

来世では...ね♥





やかましい

はむ

今のでさっきより
デカくなったな?

れろ

さては童貞
だったか?



なんだなんだこの
いちもつはあ
もはや凶器じゃないか

ぼるん

こんなモノを
女性に向けるとは
とんでもないやつだ

ちゅぽ



そんな悪漢は
懲らしめて
やらんとな

退治ひてやう

ぽ







助けて!
出してええ!!

お



あんたか!

ちよつと何よ
今の妖気は!!

驚かせないでよ
異変かと思う
じゃない!

ああ:
少々酔いすぎてな
すまない

全く人騒がせな!



立てるか?

アハハ:
気を付けるよ

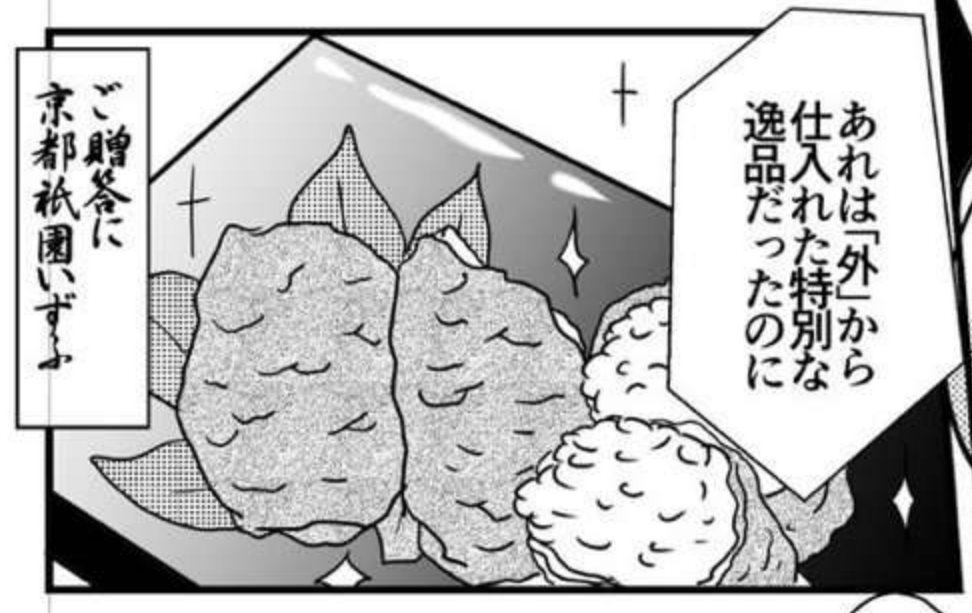


倒れるほど
吞むのは
よくないわね

スリ...♥

あとで
続きをしよらな♡

おしま

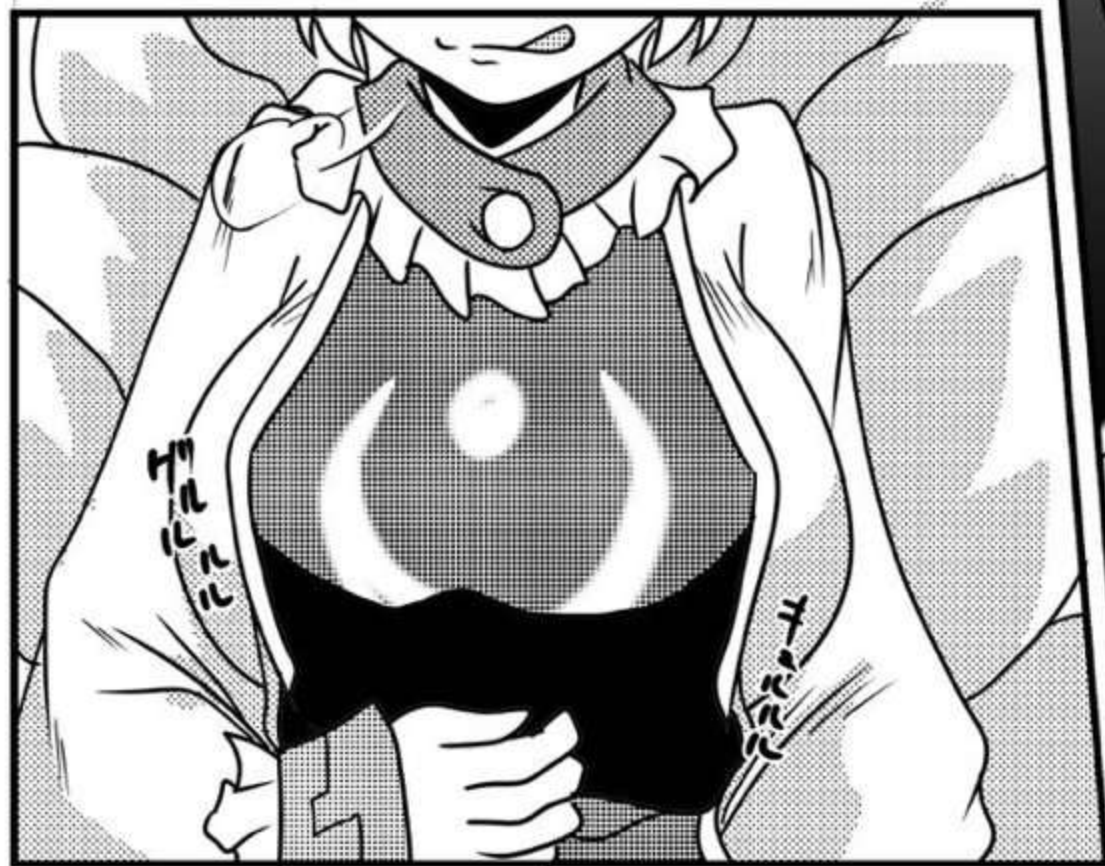




うわあっ!
助けてえ!!



ゴク



まあ、時間が経ったら
出してあげるから
暫くは私の腹の中で
反省しなさいな



ゴク...

ゴク...

藍様丸呑み

合同誌



お前は何故
自分が今
襲われようと
しているか、
わかるかな？



…で、事故とはいえ
こわあい妖怪の体裁上
人間の舐めた真似に
仕置きも無しでは
居られない…が

悪気も無く悔いている
子供のやらかしに
傷が残るような返しは
流石に酷というものだ

水鉄砲ごときを避けられないの
妖としてアしたし…

お陰で我々も
任務に支障が出てな



まあ当たったのが
まだ水に弱い私の式神、
任務中の橙だったのは
お互い運が悪かったな

いやはや、
街中で遊ぶのは
結構だが…

あんな人里の往来で
水鉄砲なぞやってたら
誰かに当たって
怒られるだろうよ…



というわけで、な♡

今からお前は
すごく怖い罰で
後悔しないで貰う

名付けて…ふふ、
「飴玉の刑」だ♡



その名の通りの刑さ、
この大口と長い舌で
飴玉を溶かすように
全身を舐り尽くしてな

味が尽きたら
そのままぐくと
生きたまま一呑みに
してやる事よ！

安心しろ♥
約束通り傷つけないし
お前が力尽きる前に
吐き戻してやる♥

むしろすっごい
キモチイイかも
しれないしな♥



あま
あま！

お♥
いいもの
見つけた♥

恥じるでない♥
喰われると思っ
子を残さんとしてしま
真っ当な生存本能よ♥

そこから搾り出す
精気というの
もなかなかオツな
ものでなあ♥

も
も

ふふ、もう
抵抗も出来ないか

ぐば

そんなに気持ち
よかったか
私の舌が
そうかそうか

それじゃあ残るは
ご希望通りの
丸呑みだ

腹の中で
生きてまます分に
身に染みていけ

妖怪に喰われる
恐ろしさをな



ごちそうさま



うふふ
藍さんッ

まが

まが

お前…ッ

どうですか
気分は…!

ヒキ
ヒキ…

空腹ゲージと
禁欲ゲージを
統合した拳句

まがまが

「おあずけ」
するとは…ッ

私はもう
知らんからな…ッ!!

うふ…ッ

すごいな博麗の札
さすがの効き目…♥

有り金
はたまた
かーが…ッ

ONE'S WAY♥

いくたたかのん



おお……っ

やはり
九尾狐とも
なると

はあ……

顎だけで
小屋のような
大きさ……ッ

つらいよねえ……
今すぐゴハンに
しまちゅからねえ……♡

気安く
触るな……ッ!!



お前だって
命は惜しいだろう

何故こんな……ッ

大妖怪相手に
人間ごときが

対等ぶっても
ダルいんすよ……ッ

ああ…

俺はッ！
か弱き人間としてっ

あなた
八雲藍にッ！

いけない…っ

ひと噛みで確実に
碎けてしまう
肉と骨の舌触り…ッ

生殺与奪を
握りたい…ッ!!

高揚した
人間の雄の

汗の味と
息遣い…っ

幻想郷の人間を
喰うわけには…ッ

でも

どうしようもなく
舌がすすいて

涎が
止まらなくて…っ

あ

あ

あ

スル

スル

スル

スル



あめ...ミ

だめえっ

のど 咽喉がツ

勝手に 飲み下...♡♡♡♡

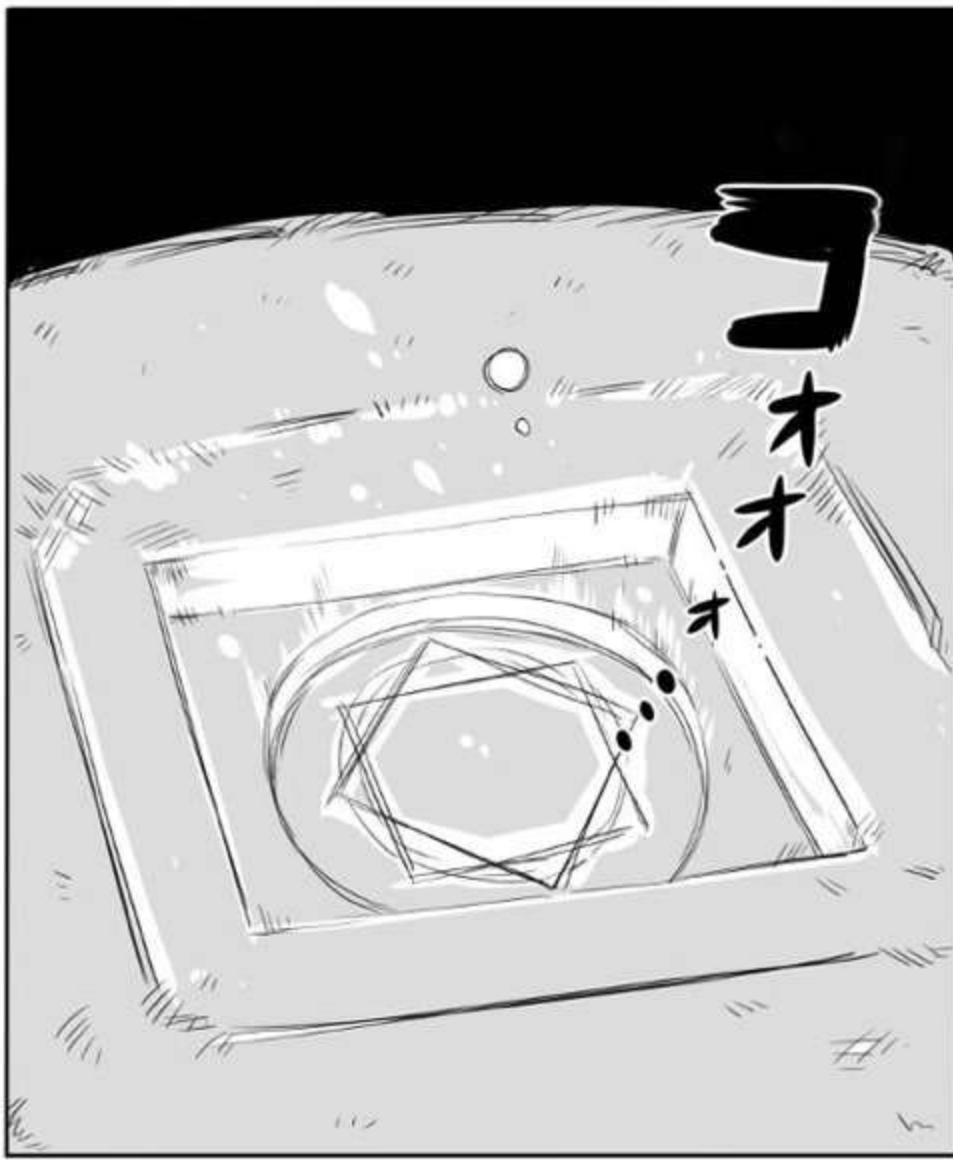
全滅 消化...♡♡♡

HAPPY END.



こころへんだな...

^妖力補給一 描いた人：しろまきみずが





ん...
長居しすぎたか
肌が荒れだした...

何かで力を補給しないと
人前に行けないな...







ガッ ガッ ガッ

ガッ
ガッ
ガッ

ガッ
ガッ



境界の賢者
システム管理者による
プロンプト承認を確認

さんごくにわたりて
よいいなし

拘束制御式
効力解除実行

わたしをみて
わたしをみて

圧縮駆式解凍

作：nf4

わたしのなかの
傾国が

第四尾全開稼働





こんなに
おおきくなったよ

次元消去型兵装



ぐしやぐしや

あかあか



あやかし展開

ぱりぱり



なるほど

今日の神隠しは
お前なんだな？

何も知らないという
顔をしているな...

?

まるで無垢な
赤ん坊のようだ...
フフ...



狐の生の転

タク



なに...
怖がる必要など
ない。

おいで... ♪

しゅる... ♡

しゅる...♡♡

どうだ？
私の尻尾はとても
気持ちがいいだろう？ ♡

ふわふわで...
しっとりしていて...
極上の羽毛のようで... ♪ ♡

する...♡♡

あ...♡

：お前は何も
考えなくていい... ♡ ♡

も...♡♡

ずずず...♡

布団で眠るように
ただ身を委ねているだけで
いいんだ... ♡

そして奥の奥まで...
ゆっくり...ゆっくり
運び込まれて... ♪

ん...♡



うんうん
よく似合ってるぞ。

その耳も
尻尾も…

さあ今日は
お前が新しく
生まれ変わった
記念すべき一日だ。

今から仲間を紹介
するぞ…

不安になる事は
ないさ。

お前は今日から
ずっと私達と
一緒なんだから…♪

はあい…♡

生まれ
変わらせてくれて
ありがとうございます
ございます…♪♡

猫をも殺す好奇心
塩屋は藍の胸となりて悟る

吟提狂華

近頃私の後を追うものがあると思えば…

どたんぽん

これは塩屋敷の息子さんではないか。

スキマ商事の仕入れ先はどこからなのか調べよと

主人に申し付けられたといったところか？





ハッ
ハッ
ハッ



やだっ!!!
放して!!!

食べないで!!

ハッ
ハッ
ハッ



た、助けて...!!



誰にも話しま
せんから...!!





パンパンになった腹越しに
私の乳で揉んでやろう…♡

ふう♡
やはり童は
甘みが強くて
美味しいな…♡

さて…

パンパン♡

パンパン♡

パンパン♡

パンパン♡

た

パンパン♡

パンパン♡



おや、
皮越しでも
わかるほど

お前の立派なイチモツが
飛び出してるではないか…♡



め
ま
や
ん



やっただ！！

やっただ！！

やっただ！！



このようになった♡

お前のすべてを
私の一部に
してやろう…



ほらほら♡
思う存分
出すがよい…

私の胎の中で
すべて吐き
出してしまえ♡



また服を
新調せねば…♡

ふう…♡
乳も尻もまた
一回りも二回りも
膨らんでしまった…



ほるん♡

ほるん♡

ほるん♡

襲撃！ スライムフォックス

えぐちオヤギ

何かがおかしいと彼は思った。森の中を駆ければ駆けるほど、違和感の中へ自ら向かっていくような気分になる。歩を進めるたびに軽い眩暈が襲った。

木々の高さは疎ら、草花の群生も毒づく黄色や木の実の赤色が散り散りに生ってまとまりがない。鳥の鳴き声こそすれど、その鳴き声は近いようで遠いようではっきりわからず、位置を捉えようとしてはけたたましい鳴き声でその場を去っていく。そして体を包むのは、全身を蒸すような猛烈な暑さ。ここしばらく雨は降っていないはずだが、地面から沸き立つ淡い湿度はじつとりと全身を不快に染めて、整えようとする呼気にすら喉に粘る熱を纏わせる。季節、雨前雨後、暑さというものは何かしらの理由があるはずが、今ここにある蒸し暑さに思い当たりは何一つと。

熱帯雨林——幻想郷ではまずお目にかかれない南国の湿地帯、ジャングルの光景。気候変動からなる暑さなどではなく、もとよりその気候からなって成立する植物の生育や暑さ、すえた香りなど、幻想郷で暮らす彼に理解できるはずもなかった。

△ △ △

『寺子屋特別授業 妖怪からの逃げ方 〽児童はもちろん、保護者から外部の方まで自由参加可』

チラシの煽り文句にはそう書かれていた。以前から「夜中に外れに出では人が消えた」などの話題で場が持ちきりになっては馬鹿なやつだ

なあなどと内心罵ってはいたものの、近年は「人里そばの飲み屋に行ったきり」だとか、「美味いと話題の団子屋に忘れものを取りに行ったきり」だとか、ずいぶんと化け物も人間のそばで人食いを働くようになったらしい。話題の相槌に笑いつつも少しばかり怖さがあったのは事実。どうせタダ、ガキンちょのオマケにでも参加しておいて損はないだろう——そのような気持ちで臨むことにした。

実際、当日、つい先程まで、半妖先生に連れられた特別講師——九尾妖である八雲藍が教壇に立ったのも安心材料であった。授業の手伝いや買い出しで人里を出歩く彼女の評判は良く、喋り口の穏やかさもとても妖かしには思えない。大きな耳やふさふさの尻尾が冗談じみて化け物である以外は、至って真面目な人に見えた。

始める前は座学中心かと思っていたから、軽くメモ取る準備はしていたものの、始まってすぐ机を教室の隅に寄せさせた。軽い追いかけてこでも始めるのだろうかと考えた。もしくは意外にも、本格的な護身術のようなものでもやるのかとも思った。しかしながら彼女は——「聴くより実践」と一つ指を鳴らす。体の軸が消えた感覚がした。足元の畳が模様一つない黒一色に変わっていたのを覚えている。そのまま体が宙から落ちる感覚がして——気づけば訳の分からないまま、訳の分からない森の中を駆けている。

呼吸が限界に達する。滝汗、肺の驚天を、少しでもましにしようとして手を置き地面を見る。背後の気配、木々のさざめきは今はない。ようやく彼は、一つ大きく深呼吸をする。

天を仰いだ。挿絵で見たような、たしかヤシの木といったそれが、大きな実をぶら下げている。あれには果汁が豊富と聞いたことがあった。あれでも呑めればまだマシになるのだが、その数倍も高い木によじ登っている間にあいつは追いついてくるだろう。そんな暇はない——と、黄

昏かけて、また新たな違和感に気づく。大振りな葉の横でぎらつく太陽に手をかざして光を遮る。確か自分はこの森に入った直後にも同じ仕草をした。

彼も友人に誘われて狩りの真似事をすることはあったから、山の中で日の位置と明るさを確認しては暮れを確認することはあった。言ってみれば手癖のようなものだ。しかしどうだ、いまこの手に刺すまばゆい光は、恐らくは発光源の位置も強さも、この森に入って数時間は経とう今、何一つ変わっていない――。

「くすくす。ここは『授業用』に作った空間、つまりゲームの盤面だ。従って時間経過の概念は存在しない。特別『授業』だからと終業のチャームを期待しても無駄だぞ？」

咄嗟に後ろを振り向く。姿はない。だが確かに気配はする。落ち着いた声でありながら、獲物を狙う獣性を秘めたそれに、反射的に体を翻した。しかしながら体は無情にも縦転し、そのまま前から軟土へ倒れこむ。ズシャと鈍い音で約六十kgが転がった。

足元を見る。そこには三十センチほどの、青色の半透明のゲルの塊。踏み抜いた痕がネチャリと糸を引いて足裏をのり付けていた。呼吸を整えることに必死で、その畏、ばら撒かれたトリモチに気づかなかつたのが彼の敗因――。

「はい、捕まえたあ♥」

声はすぐ近く。左右を見渡しても姿はない。最後に真上から薄ら影が降り注いで――。

――もにゅんっ、ずりゅうつ。

と、マヌケな音とともに液体とも固体ともつかぬそれが男の体を包

み込んだ。彼は反射的に頭を両腕で防御していた。衝撃に備えて体がこわばって、動かせぬ足のほうに体を寄せていた。衝撃らしい衝撃はなく、代わりにぬるま湯の湯船に放り投げられる感覚が全身を襲う。

「上から来るヤツにも気をつけねばいけないし、鈍重な動きの妖かしほど畏を使うことも多い。また一つ賢くなったな」

追跡者たる藍の肉体、それは変化たる人姿ではなく、狐の本性たる獣姿でもない。

姿形こそ人間に似せているものの、体は木々の影に紛れて刺す日光に文字通り透き通って、反対側の疎らな風景が見通せる。肌からは固まりきらない粘液が延々とすべり落ちる。普段はそのそりとはためく九つの尾も同様で、今は上に緩やかに伸びればどろりと液体を滴らせ、下へ揺らめけばぼたぼたと濡れ尾の余韻を垂れ零す。スライム――。その異形の姿を、彼はつい少し前に初めて見たばかりで、いまこうして体を捕らえられてなお、不気味さに慣れることは叶わない。

体を暴れさせる。水中で溺れるようにしてもがく。だがその藍の軟体はぐちゃり潰れて絡みつき、服を湿らせながら男を捕らえている。疎らに残るスライムの一部が風船のように膨れていく。密度はたしかにそのままに、質量が徐々に増えているのだ。単性生物の分裂、自己増殖。顕微鏡の中で人知れずに行われるそれが、今確かに目視できる大きさで徐々に徐々に、増えて膨れて、ばらばらだったはずの藍の体の一部達が繋がって――巨大に膨れた藍の体は、周りを取り囲む木々にも劣らぬ大きさへ変貌していた。

正座で座り込んだ形こそごぢまりとしているが、まるで縮尺を誤ったかのように、身長も胴囲も成人である彼のそのまま三倍、いや四倍ほども巨大だ。男の体は、藍の下腹部に突き刺さるようにして捕らえられている。脚が暴れたがる。つま先がピクピクとうごめく。しかし、

攪拌とは押し上げる面積が大きい程に不利であり、中心に近づけば近づくほど太く筋肉の密集する人体においてはなおのこと動くに動けない。ゼラチンの底なし沼の中で、藍がそのスライムの体を緩慢に動かした。

男の背筋が鯉跳ねした。下半身が動かさない分、背中だけが豪快に反る。サイズや質量だけでなく、その粘度すらも自由自在の肉体は、巧妙に男の股ぐらを掴んでいたのだ。

「『捕まったらおしおき』、そうだったな」

粘る水流が触手状に形作られ、うぞうぞと蠢いたかと思えば、それらが一斉に半身を握り込む。巨大な掌が股ぐらを鷲掴みにするように、密着して、握って、開いて、圧迫と収縮を繰り返す。藍の体は液体なishi半固体であるから、男の体につつかる度にブチュブチュと音を鳴らして碎けてしまう。ただ、一度碎けて終わりではない、それは藍の体の一部、人間が四肢を動かすのと同じように自由自在、何度でも形作れる。

ブチュブチュツ、グチュツ、ギユツツ、ヂュブブツ……。激しい咀嚼が狙うのは男の股間であった。丹念な粘体揉みほぐしの中で、執拗に股間の間をこすって、突いて、更には包みこんでいるうちに——既に下半身は勃起していた。揉みくちやにする中で既に服は剥がされており、藍は背を曲げて包み込むように、真上から男の痴態を観察する。「あははっ、すぐにおつきしちやっとなー♥ さっきの一回、癖になっちゃったかなー？」

さっきの一回——男は既に一度行為をもたらしられている。この空間に降り立った直後に藍に捕獲され、ルール説明と称した搾精を味わっている。困惑の最中での執拗な精液舐り——あれがまた来ることを確信した瞬間、男は咄嗟に抵抗を口にした。

おい、やめてくれ、俺はただ見に来ただけだっ、お前が教えるべきなのは餓鬼相手だろう——。必死に叫んでも軟体の扱きが緩むことはない。そして下半身を包み込んでいた感触が今度は、明確に、勃起しきった肉棒を掴んだ。

「んー？ 妖かしの私からすれば、お前も餓鬼も大差ないさ。だって関係ないもんなあ？ ヒトオスがこーするだけで、声も出せなくなっちゃうの・に・は♥」

必死にひり出していた声がぐんと詰まる。腰が震える。急所を掴まれて一瞬たりとも怯えを見せない生き物などいないものの、彼の戦慄はどうにも甘く蕩けた痺れを伴っていた。

シリコンゴム状に変質した内部はぷりぷりとしたパチンコ玉状の浅ひだに満ちて、根本から睾丸までもを粘膜の房で包み込んでいる。それら一つ一つが蠢いて、ねばついて、無数の凹凸で肉棒を歓迎する。男は小さくうめく。ウツウツと小刻みに、情けない悲鳴を上げた。それは、先に味わった快樂——女腔に挿入したような、肉の暖かさと同種では味わえぬ、異付けがもたらす快樂とは異なっていたからだ。同種では味わえぬ、異形の体もたらす特殊快樂が、彼の予想を裏切った。

「この体も便利なものでなあ、どこでも自由に形も硬さも変えられるのさ。人や獣の体に比べて重たいのだけが難点なんだが……一度獲物を捕まえてしまえば、ほうら」

ぷちゅぷちゅぷちゅっ——可愛らしい音で、粘体が一斉に蠢いた。異形の疑似ホールが流動して、ゆっくりゆっくりとペニスを前へ前へと送り出そうとする。バキュームするように、ローラーに巻き込むように、ズルズルと吸り込む。音こそ可愛らしいものの、その体は今にも腰砕けになりそうなほど蕩けて震えている。

によるによる棒、ウォーターズスネーク、そのような名前の玩具があ

る。筒状のビニールに液体を満たんに詰め、握っても握っても手の中
から逃げてしまうという指戯れの玩具だ。彼は今まさにその中にペニ
スを挿入しているに等しい。問題は、搾精の為に下半身を包み込むだ
けの十二分のサイズを持ち、表面が粘つくスライムで出来ており、ス
ライムの中で堪能しているがゆえに、一向に最奥までたどり着くこと
叶わず、延々と延々と挿入感だけを味わわれていること、その表面が
おぞましく、ペニス嫩りの柔突起に満ちていること。

「んふふー♥ぬぶぬぶーって挿れ続けるのきもちーねー♥じゃあ今
度はこうしてみようか♥」

バキュームがゆっくりと停止して、今度は吐出の動作を亀頭に浴び
せていく。どろどろのスライム溜が先端から溜圧を押し付けられてい
く。水圧は藍の体内を循環しているから、幾ら流れてもその圧力は収
まらず、それどころか強くなっていく。濁流の中に立てられた小枝、ポ
ンプの中の蟻。空気を含んだ音は何一つ変わらず、ただ藍の中で縦横
無尽に音響いている。内部で肉棒が左右上下にかき混ぜられ、捏ねく
られる。グチュグチュにぬめった蛸壺愛撫の責めがもたらす下半身の
脈打ちに、唯の人間たる男が耐えられるはずもなかった。

あーっ、あッあッ——と、悲鳴と共に腰がガクンと突き上がる。ブ
ルーの液体の中に、勢いよく白い塗料がぶちまけられた。男の精液は
あつという間に登りつめて、渦巻く濁流に精液をミックスしていく。脈
打つ精液の勢いはねばねばのゼリー体に敵わず、尿道口のすぐ手前で
せき止められて球状に溜まり、留まる。腰を振る必要もなく、ただ仕
置きとして搾り取られる雄の放精。その無様を前に男は俯き羞恥を堪
える。……藍はその様子すら見逃さない。

「あら、もう出ちゃった……？ じゃあ最後まで出さないとな♥」

ヒッと息を呑むと同時に、今度は尻の穴へとスライムが伝っていく。

液体に変形させたものがくりくりとくぼみを弄る様は指での愛撫にも
似ていたが、性質故に侵入は容易。細く硬い感触がつぶと針のように
一つ侵入してすぐに、その内部で硬度が増し、膨張し、すりこぎ棒の
ように太く固くなって、そのまま男の腸内を圧迫した。ごりゅっ、む
にゅっ、ぬるんッ、立て続けに射精直後の敏感な前立腺の硬直を、一
度こじ開けられてぬかるむ穴を、そのまま内側から擦って搾り出そう
とする。白濁溜まりにピュクと一滴ずつが搾り取られては、無数の容
積量を持つ藍のクリームボディに混ざって、栄養として吸収され、精
液の跡は跡形もなく消え去った。

△ △ △

「はあい、お疲れ様あ。どうだった？ 悪い妖怪に捕まるとこーんなに
恐ろしい事になるんだ。ただ逃げるだけじゃあなく、頭を使って逃げ
ないとな」

こうべを垂れて崩れる男の前で、藍がにまにまと嘲笑う。
射精後の余韻はいまだ収まらず、体が弛緩しきったまま力が入らな
い。男の体はぶらりと藍のスライム触手に持ち上げられ、赤子でも抱
えるように脇の下から持ち上げられ、吊り下げられている。

藍はどこからともなく取り出した一台の端末を操作していた。液晶
画面の付いた端末を、その粘ついた指先で器用に操作——していたか
と思えば、小さくタップミスに苛立ちながらも、一つの映像を男に見
せる。

「ちなみにー、もっと怖いことになってる子もいるけどなあ」

霞む視界で見やった画面は、ノイズ混じりの中で四つに分割された、
所謂監視カメラの映像だ。上から見下ろすような形で映し出されてい

たのは、少年と——その背後から追跡する獣、四足の狐。

息を呑んだ。狩りで捕らえたことがあるような小ぶりな一匹の獣ではない。激しい地鳴りがずしんずしんと鳴るたびに映像がぶれる。カメラを横切る度に、恐らくは高所にあるはずの画面が焦げ茶一色に埋め尽くされる。山のような巨躯は、幼少の頃に凶鑑で眺めた恐竜に似ている。比較の為に並べられた人間のイラストそっくりそのまま、少年との体格差は、その脚一つで踏みつぶせてしまうほどの大差、極差。少年が全力で逃げている間、そいつは小走り、僅か獣のひげ一本分の距離を維持したまま追跡し続けている。少年の十歩は狐の一步、全力の走狗であればいつでも捕らえられる。客観的に映像を眺めている男には直ぐに理解できた。狐はタイミングだけを探り続けている。ただ目の前の玩具が走っている、それだけの理由で追いかけている。獲物を、弄んでいるのだ。

映像の映し出される遙か前から走り続けていたのだろう、少年の脚は既にふらついて軸を失っている。呼吸も絶え絶えで、真上すら向きながらなんとか酸素を取り込んでいる有様だ。

つま先が蔦に引っかかる。そのまま前に倒れこむ。男が息を呑んだ頃には、少年の体は宙に浮いていた。

背後から獣の舌がぐるりと巻いて転倒を阻止する。そのまま胴体ごと引き寄せて、ぢゅつと息一つにすす。あぎとが真上のカメラを向いた。口の中の暗がり、歯牙の並びと真っ赤な奥行きを見せる粘膜をちらつかせたか。おぞましい口腔に、少年が吸い込まれていく。舌が彼の脚を粘膜のほら穴に引きずり込んだ。

画面の中の少年と目が合う。え、と小さな呟きがはつきりと聞こえ、その言葉の後にずりゅつという生々しい音がして、あぎとが直ぐに閉じた。——彼の鈍い叫びが遅れて肚の中から聞こえた気がしたが、飽

きたように去っていく獣の足音にかき消されて、映像は何事もなかったかのように、ただ乱れた獣の足跡だけが異質なまま、静かな森の中を再び映し出していた。

肝が握り潰される。血の気が引いていく。当の藍は青肌も艶やかにけらけらと嘲笑っていた。

「んふふー♥ なぁに安心しろ？ この獣も授業の為に用意した私の複製の一つだ、殆どの場合には生きて返すさ……だがなぁ、少おしばかり危ない場合もあってなぁ」

男の体の下でごぼごぼと音がする。藍の体に変質する。巨大な体のうち、へそを中心にぐぼりと大穴があいて、まるで何かを包み込むように、粘体の花卉が花開いていく。

「この空間にばら撒いた私の複製だが、ただ私をそのままコピーしただけでは疑似妖怪の襲撃というにはパターンに欠けてしまう。故に、幾つかその性質にランダムなノイズを加えてあるんだ。具体的には、そうだなあ……狩猟欲、性欲、捕食欲、凌辱欲……人を襲う際に湧き上がる人外の欲求の大小、それら全てが個体によりばらばらだ。つまりどういふことか、分かるかい？」

しゅわしゅわと泡立つ湯気、マグマを彷彿とさせる熱気、先程までしていなかったはずの濃厚なミルク臭がむわりと立ち込めて、ねちっこく喉と鼻に絡む。宙に釣り上げられた男の脚が、本能のままにじたばたと暴れた。

「仮にそれらの欲の幾つかが上ぶれてしまったなら……もしやすれば、そのまま気に入られて、弄ばれて、下手をすれば食われてしまうかもしれないなあ……♥ かっくいう私ももう堪らんのだよ？ 先程この体越しに味わったお前の冷や汗、危機と分かっていたながら漏れる無様な子種、きゃんきゃんひゃんひゃんと子犬のような喘ぎと悲鳴い♥ そのいずれ

の味も、どうにも甘美で甘美で、もう少しばかりしつかりと、味わいたくなつたよ……♡」

恐る恐る下を向く。足の指先に触れたのは、巾着のように入り口すばまる肉厚な肉壺。巨大な藍の体で形作られた疑似子宮は、その人の血の気を感じさせない寒色の色みのままに、生々しい臓器の蠢きを伴っている。暴れた足の先端が触手に絡みつかれ、彼の体が一直線にされると、ゆっくりゆっくりと、その先端へと埋まっていく。一切の抵抗も許さず、ただゆっくりゆっくりと、埋まっていく。

「なあに、怖がることはない♡少おしばかり君の全身隅々から『吸精』させて貰うだけだ♡でも……私の肚の中、とっても暖かくて気持ちいいからあ、勝手にお精子びゆるびゆる♡びゅーびゅー♡漏れちゃうかもなあ……♡私が満足するまで搾り取ったら、ちゃあんと開放してあげるからあ、いっぱいいっぱい、気持ちよくなっちゃおうな♡」

首までがスライム壺に埋まる。たすけて、と一つ呟いたが、藍は聴き入れるでもなく、無視するでもなく、軽い頭撫でとニンマリとした笑みで返事した。

「はあい、行ってらっしゃーい♡」

つぶんっ、と押し込んだ掌ひとつで体が滑り、そのままスライム壺の中に押し込まれる。その瞬間壺の入り口を塞ぐように、うぢゆるうぢゆるとスライムが増殖して、そのまま藍の肚へと閉じ込められた。

鼻や口から直接繋がるストローのような細い酸素穴、苦しきはない。しかし、そんなことが気にならないほどに、まとわる全身の痺れが、恐怖一辺倒だったはずの彼の意識を纏めてかささらう。藍の言う吸精、ドレインなどとも言われる栄養吸収。手足のつま先、皮膚の皺、脇や尻の谷間のような普段開帳することのない部分。体のありとあらゆる隙間に乳液のようなオイルが絡みついて、じゅわじゅわ、ぷちゅぷちゅ

と炭酸泡が弾けていく。こそばゆさが細胞全身から溢れて堪らなくなる。それはまるで、細胞一つ一つが射精し続けているかのような、表面から体を溶かされていくような。

意識した瞬間、体がぐねぐねと悶えて、その壺の中で蠢いた。入ってきたはずの穴から出ようともがこうとして、快楽に耐えきれなくなつては両腕を抱えて、蛇のように左右に揺さぶってみては、喘ぎ混じりに懇願した。

出してっ、出してえっ——。子供のような悲鳴を上げながらも、藍はお仕置きと言わんばかりにその吸精を強くした。内部で気泡がごぼごぼと上がって、彼は自分が気づかぬ間に再び射精を催している。彼は気づいていなかった。自らの声が声変わりする前同然に甲高くなつていたこと、四肢や胴が少しずつ、幼子同然に萎んでいっていたこと。「ふふふっ……ああ、直ぐに出してやるさ。君が出れる頃には、もう君が君と分かる人は誰一人いなくなつてるかもしれないがなあ……♡くっ、くふふふっ♡あつ、また射精してえ……♡……ママのお腹に射精するなんて悪い子ですねえ♡ちゃあんと赤ちゃんから、躰け直してあげないとなー♡……くふふっ、くくくくっ♡」

藍は楽しげに腹の中の赤子——男だったもの——を撫でいた為気づかなかつた。映像を見せていた端末から鳴り響く警報にも、この授業用の空間に無数の瞳が展開され始めていたこと。寺子屋全行方不明未遂の事件を前に、主人たる八雲紫は解決に動き出していた。……その麗しい顔立ちに、これでもかと青筋を立てながら。

丸呑み合同
参加させていただき
ありがとうございました！

また新たな扉を
開いてしまったよ！！

アクロポリス

Twitter: llllllkkkkk



主催のオヤワヨシです。

藍様に丸呑みされる合同誌、やりてえ
やりてえと言いつづけて数年、ついにこの時が
来てしまいました。背中を押してくれた数奇な藍ワラの
みなさま、そして、こんな頭のおかしい合同に参加して
くださった皆様方、まことにありがとうございます！！
ラミア藍様みたいな人外藍ちゃんも書きたか、なけど、
今回は主催なので「ストレートに藍ちゃんです。
やはり強力な妖怪の藍様にちっぽけな人間
とて「わからせ」されたただの食事として胃に
おさめられて無様に射撃した後
消化されたいですおねいな！
そうだとオ！?
オイ！



オヤワヨシ

獣姿にあたって
八雲藍要素として
帽子のお札を
残したら

バーコードハゲっぽく
なってしまったかもしれない
ごめんね藍ちゃん

@_mumumu : むむむ



ばんく堂です。

二度はお誘いいただき
ありがとうございました！！
とはいえ皆様、おんがネに
叶っているかどうか...
11/12の機会ありました
ら、次回の
正×合同誌
でお会いしましょう！！
...なに、無い？
おんが

おんが



お誘い
ありがとうございます！！

しろまき
おんが

只のみにて「こ」解釈がなくて
より良より良くと考察してみましたか
一番に思いついた養分補給: おちつくという(笑)

食であり、生であり、生で
あるゆえに見えぬよ
見えかたが、ちがって
いとこにこそ
女のみ、良さ
あるのかも！！



おんが
ちゃん

でも個人として
しほ
おんがも
溶かしてほしい...

「解けないVore」と
描いてみたよ♡

「養分補給」
生みださない
もらうEND。



いたたきん

俺も藍様の
赤ちやんになっ
狐娘に生まれて
変わりたい。

タク

ここが
八雲藍二次創作
性癖の射爆実験場



藍様は普段丸呑みなんて
はしたない事しないよ
よく噛んでよく食べるよ
つまり丸呑みする時は
どう考えても人間と戯れるときなんだ
あざっした

えぐちオヤギ

「描きたいです！」
と申し出て参加させて
いただきました！
いつか描きたいと思っていた
シヨタ喰い
藍様を描け
たので思い
残すことは
アリマセヌ！



藍様丸呑み合同誌

発行日 2022年 12月 31日 コミックマーケット101 [第1刷発行]

2023年 1月 1日 DLsite ダウンロード版

発行・主催 YAMADA AIR BASE オザワヨシ

印刷・製本 ねこのしっぽ

連絡先: coop_sb_5@hotmail.co.jp

twitter: @_ZAW_

※この作品は東方projectの二次創作であり、公式の創作物とは一切関係ありません。
※この作品はフィクションです。実在の団体・人物・事件・地名等には一切関係はありません。
※本書の一部、または全部を無断でweb上にアップロードすることはおやめください。

WARNING:

- The producer of this book has not permitted following,
- Reproduction of this book.
- Making of all means of copies of this book.
- Resale of this book.
- This book is done in the scanning and uproad to the Wired network.
- The producer of this book prohibits sharing the book by Wired network and the resale.



背後から獣の舌がぐるりと巻いて転倒を阻止する。そのまま胴体ごと引き寄せて、ぢゅっと思一つにすする。あぎとが真上のカメラを向いた。口の中の暗がり、歯牙の並びと真っ赤な奥行きを見せる粘膜をちらつかせたか。おぞま
えぐちオヤギ
彼の脚を粘膜のほら穴に引きすり込んだ

